

人の手ができること

特定非営利活動法人ウイズアイ

なかだ ゆうこ
仲田 祐子

はじめに

保育園から現在勤める子育て支援の法人に転職して数年。学びを深めるために、おもちゃ、絵本、レッジョエミリアアプローチなど、年度ごとに自分でテーマを決めて外部の研修に参加していました。もっと深めたいことが出てくる一方、自分に足りない知識やテーマも見えてきて、その筆頭が「自然」でした。ただ、このときのわたしがイメージする「自然」は、草木や鳥の名前を知っているとか、上手にカブトムシの世話ができるとか、そういうことでした。「いのち」に至っては、連想するのは“生死”についてくらい。ぐうたら村の何たるかもよく知らず、「自然」「いのち」の概念もそんな感じで、今思えばよくこの研修に飛び込んだなと思いますが、そんな私だからこそ、この研修との出会いは必然だったのです。

「自然」ってなんだろう？

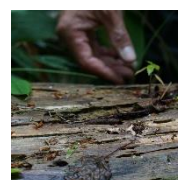
1回目のぐうたら村での研修を終え、大きな問いが残りました。

—自然ってなんだろう？

そもそごりさんは「自然」という言葉を使いませんでした。「自然」のなかで「自然」について考える研修で、講師が「自然」と言わない。これは絶対に意味がある、と思いました。

ごりさんと森を歩き、フィールドワークに参加して、循環の中に自分が居させてもらうという感じを抱きました。これは確かに「自然ってすごい」ということなのですが、そこにあった迫力、におい、広大で、身近で、変化するものと、変わらないものと、理にかなった森の物語。そういうふくふくみちみちとしてまあるい感じは、ただ「自然」と表現するにはちょっと足りません。「自然」と言ってしまうことで、この世界のいのちをひとまとめに記号化してしまうような気がします。

「自然」の対義語は「人工」？いいえ、二項対立ではないことはこの二日間で学びました。「自然」というと人が手を加えない手付かずな環境をイメージしがちですが、人の手が加わることで、「自然」が循環したり、再生したりして、より豊かになります。



人の丁寧な暮らしや日々の営みが、人だけではなく他の命も豊かにしていく。
ぐうたら村はそういう場所でした。



実践できない

ぐうたら村から帰ってきた翌日、七夕の笹を細かく刻んで土に混ぜました。お茶葉を捨てるのをやめました。カボチャやピーマンの種を捨てずに植えてみました。楽しいけど、これが何になるんだろう？

そもそも、職場で何を実践しよう。「子ども真ん中」ではなく、「いのち真ん中」で考える社会。そこに向けて私は何ができるか。何をすべきで、何を手放すべきか。「脳で考えず、まずやってみる」って、どうやるんだろう？

ゼミの仲間たちは保育園や幼稚園で、さっそく職員会議に挙げて、研修の報告をし、バイオネストを作ったり、バグホテルやコンポストに挑戦し、失敗したり、理想の園庭を話し合ったり・・・試行錯誤しながら実践を進めていました。私は、どうしていいかわからず、ひとまずこう考えました。

「誰にも迷惑かけないでやろう」

そして、何をやろうかと考えては「園庭がないからできない」「一時保育だからできない」「きっと危ないって言われるからできない」「お金がかかるからできない」などと勝手に打ち消し、実践に手を付けることなく時間だけが過ぎていきました。

どん底の中間発表

そうして迎えた11月のぐうたら村。当然ながら中間発表はボロボロでした。仲間たちは様々なアクションを起こし、もがきながらも職員で共有し、実践を進めています。一方で私は、頭の中でぐるぐる考え続けただけで、結局何もしていません。職場だからこそできることを、園庭がなくても、一時保育でも、この条件だからこそできることを、私がやってやる！なんて思っていたのに。

あまりのボロボロっぷりに、帰るまでずっと心は落ち込んで、自分を責めました。

—私なんかが参加してソニーさんにも大豆生田先生にも申し訳ない。

—研修の趣旨も理解せず、身の程知らずだ。恥ずかしい。

そんな私の様子を気にかけて、帰り際、ごりさんが右手をすっと差し出してくれて、握手。

「ゆうこさん！大丈夫だから！そのままでもいいから！」

“気にかけてくださって嬉しい。”と感謝する一方で、“気を使われてる。もう「そのままでもいい」としか言ってもらえないんだ。”と極端なマイナス思考に陥り、涙をこらえました。

起死回生

落ち込んで帰ってきましたが、2月の実践発表から逃げるわけにはいきません。原因は外側にはないことは、とくに気が付いています。ぐるぐると自問自答し、自分を責め続けながら、ふと、思いました。

ちゃんと、相談すればよかった。

行動せず、全部打ち消してたのは自分だ。

「結果を求めない実践がしたい」といいながら、結果を求めて踏みとどまっていたのも自分でした。

11月末、法人内研修で、約80名の職員に話を聞いてもらいました。ぐうたら村での学びを紹介するとともに、中間発表で大失敗した話と、そこから前を向くために考えたことを話し、併せて実践したいことを例を挙げて提案しました。失敗と反省と、気づきを素直に伝えたことで、伝わった実感がありました。

研修後、「庭で今朝摘んだお花、保育室に飾って」と持ってきてくれる人や「伝わったよ」と連絡をくれる職員もいて励まされました。一緒にやろうと言ってくれる仲間も現れ、発表からさっそく1週間後に、バイオネストを作ることになりました。



実践—バイオネストをつくる

集まったのは職員とその子どもたちです。まず紙芝居を見てもらいながら話をしました。その意図は、作業手順よりも、そこに物語があることで、一人ひとりが思いを巡らせ、自分事として参加できたらいいなと思ったからです。

作業場所は、狭い駐車場の奥のスペースです。粗大ごみをどかし、除草のための堅いシートを剥がすところからやりました。



大人も子どもも「身体」を動かしながら「心」も動かし、感じている様子が伝わってきました。

朽ちた枝の中で冬眠しているクワガタを発見したとき、2人の子がぐっとのぞき込んだのち、「ここが良い土になったらカブトムシやクワガタが住むんだね」と言いました。2人にとってここが特別な場所になった瞬間だと思いました。



また、別の子は、帰り道、「この枝もあの葉っぱもあそこに使えるね」と目を輝かせて保護者に話したそうです。この活動参加をきっかけに、行きと帰りで彼女には同じ風景がこうも変わって見えるのかと驚いたと、保護者が話してくれました。



保育～地域～仲間へ

その後、保育の中では子どもたちとはっぱを集めてきて入れる、ということを繰り返しました。ここを「はっぱのおうち」と呼ぶようになり、散歩先で拾った物を「はっぱのおうちに持っていこう」と言うなど、身近な場所になっていきました。散歩の道中、小学校の用務員さんから、集めた落ち葉をもらい散歩カートにぎゅーぎゅーに積んで帰ってきたり、市の公園管理課に電話して、公園で集めた落ち葉を何袋ももらったりもしました。



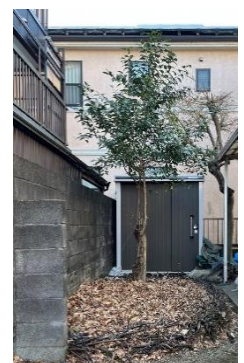
活動の様子を理事長が発信してくれたり、法人スタッフでも共有して、気にかけてくれる職員が増えました。同僚が誘ってくれて、地域の農家さんに連れて行ってもらい、落ち葉掃きに参加しながら『武蔵野の落ち葉堆肥農法』について教わりました。また別の同僚は、ご自宅が農家で、肥料に使っている米ぬかを持ってきてくれました。

手入れをしていると、通りかかったスタッフが立ち寄ってくれます。楽しい“ふみふみ”（落ち葉を踏みしめる作業をこう呼んでいる）を模索、トランポリンを置いてこれは名案！と、トランポリン大会が始まったこともありました。（ちなみに、農家さんに聞いたところによると、「はずんじゃうからあまり意味ないよ」だそうです。）



以前はここに木が生えていることにさえ注意を向ける人はいなかったのですが真ん中の木の気持ちになって、「今年の冬はあったかくてびっくりしてるだろうね」とか、「奥のモミジがかわいそう」などと、木にとってどうか、という会話も職員から聞こえてきます。

実践を通して、子どもだけでなく、職員や地域を巻き込みながら、一緒に見守る場ができました。春が来て、ここに命の循環が生まれるのが楽しみです。



おわりに

中間発表で大失敗した私ですが、そこから這い上がるために動いたり感じたりし、改めて脳で考えず「やってみる」ことの大切さを実感しました。11月になってやっと「やってみる」の一步を踏み出し、仲間たちより遅いスタートとなりましたが、挫折があったからこそ、ごりさんが始めにわたしたちに授

けてくださった言葉「このゼミで大切にしたいこと」6 か条に向き合うことができました。ありがとうございました。

これから（伝説の3期生、第2章へ続く・・・！？）

ぐうたら村で私が感銘を受けた「ひとの暮らしの在り方」は、いのちが支え合うお互い様の暮らし。私はこれからもこの暮らしのデザインを考え、実践し続けたいと考えています。毎日花を飾るだけだって良いと思う、とごりさんにアドバイスを頂きました。

人の手は環境を破壊するだけではなく、混ぜたり、切ったり、積んだり、重ねたり・・・して、ぐうたら村のように、枯れた土地を豊かに蘇らせることもできます。そこまで大規模な実践はできなくても、いろいろなものが植木鉢として蘇り、野の花を生けたり、落ち葉を美しく飾ったり、お皿を丁寧に拭いたり、こういうことも人の手ができることです。



ネガティブ を ポジティブ へ。

私たちが抱える未来への「課題」のための活動ではなく 私も地球も喜ぶ気持ち良い暮らし へ。

私自身がワクワクしながら人にとっても地球にとってもポジティブな仕組みを考え実践して、子どもたちと「いのちまんなか」の物語と一緒に感じ、喜び合っていきたいです。